

KWAN

名古屋大学大学院環境学研究科



インドネシア・バンダアチェにて（田中重好2005年2月12日撮影）

March, 2005
9号

三河地震を絵でのこす

林能成・木村玲欧

昭和20年1月13日午前3時38分、愛知県三河地方をマグニチュード6.8の地震が襲った。この地震は三河地震と呼ばれ、現在の安城市や西尾市を中心に死者2300人を超える大被害が発生した。しかし、戦時報道管制のため、被害状況や、援助のあり方、震災からの復興の様子にはいまだ不明な点が多い。フィルム不足や自由な報道が規制されたという時代背景もあって、被災写真がほとんど残っておらず、現在残されている写真だけからではこの地震による災害の全貌を知ることは不可能である。

我々は2003年から三河地震の被災者へのインタビュー調査を開始し、その調査で得られた被災体験を文章で残すのみならず、絵で再現するという新しい試みを行っている。文字による被災記録は正確な記録が可能であり欠くことはできないが、災害に興味のある人以外に読んでもらうことは難しい。多くの一般の人に、地域の過去の災害の様子を伝えるきっかけとなる「何か」が必要であるが、不幸にも写真は残っていない。

そこで、地震被害発生的一瞬间や避難生活、復興の様子を絵にすることができれば、貴重な被災体験を誰にでもわかりやすく伝えることができると考えた。三河地震から60年がたち、被災者は皆、高齢である。その貴重な体験は、地域社会にはほとんど受け継がれていない。地震の活動期に入ったと言われる現在、これからの社会の中心になる子供たちが地元の地震災害を知り、次の地震に備えるきっかけになることを、この震災を絵にする試みは強く意識している。

実際の絵の作成は愛知県立芸術大学美術学部日本画専攻で非常勤講師をされている阪野智啓(ばんの・ともひろ)氏と藤田哲也(ふじた・てつや)氏という2名の若手画家に協力いただいている。二人は院展入選経験もある新進気鋭の若手画家であるが、創作活動のみならず、郷土史や災害、そして人間の行動にも非常に深い興味を持っている。まさに余人にかえがたい存在である。



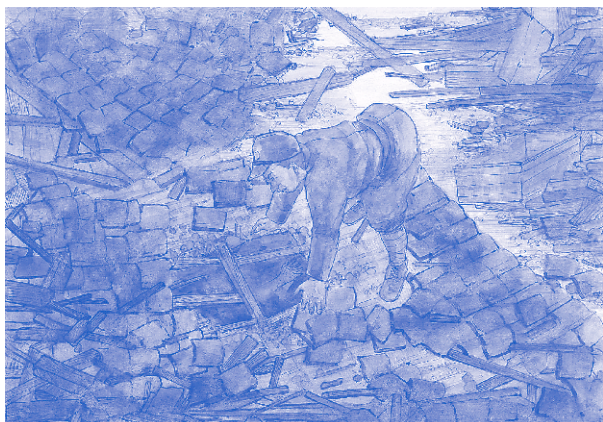
【図1】防災研究者と画家が協力して被災時の様子や当時の暮らしを聞き取る

作画にあたっては、画家の方にもインタビューに必ず参加してもらっている(図1)。生の声を聞き、被災者の人となりを感じることによって被災体験のイメージを共有するためである。そして話を伺っている方の記憶がはっきりしていて、印象深い事柄で、かつ後世への教訓として適切だと思われる被害のようす、災害時の対応行動・生活再建のようす、支援のようすについて5～7点程度を選び出してアクリル水彩絵具による日本画を作成する。特に絵の題材を選ぶ際には、一人の人間にスポットライトをあて、その被災から復興までを追えるように配慮している。また作成した絵は必ずインタビューした人自身に見てもらい、記憶していることと絵との差異について指摘をもらっている。修正の必要が生じた場合は持ち帰って修正を行い、絵の完成度を高めている。このように再調査することで、更に詳しい体験談が得られることも多い。

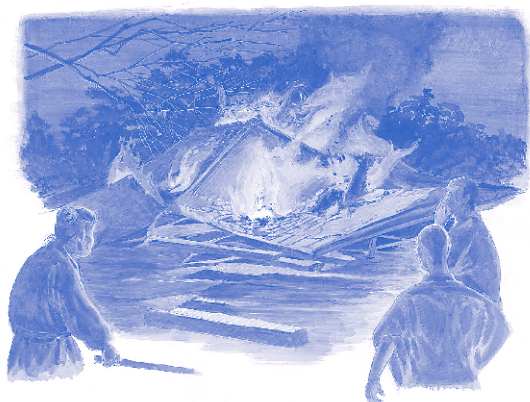
ここでは、これまでの調査から3件のインタビューの概要とそれを元に作成された絵を紹介する。



碧南市在住の原田三郎(はらだ・さぶろう)さんは大正8年生まれ。当時の明治村西端集落(現、碧南市湖西町)で三河地震に遭遇した。戦前から写真が趣味で、東南海地震・三河地震では軍隊に報告する目的で地元の被害を撮影し、その一部を保存していた。原田さんは近衛兵として東京にいたが、昭和19年12月、父親の手紙によって故郷が東南海地震で被害を受けたことを知り、翌年1月5日から10日間の特別休暇をもらって里帰りをしてきた。三河地震はその最中に発生した。地震発生時、自宅には7人の家族がいたが、幸い死傷者はなかった。原田さんは、服や靴を身のまわりに置いておく軍隊で身についた習慣のため、すぐに身支度を整えられた。屋外に出たあと、真っ暗で何もわからず道具もない中、生き埋めになった隣家のおばあさんを救出した(図2)。その後、自分が近衛兵であるため近くの小学校に走っていき、天皇陛下の御真影を安全なところに移した。夜が明けてからのことは無我夢中で覚えていない。実家は倒壊してし



【図2】道具がない中、生き埋めになった隣家のおばあさんを救出した(原田三郎さんの体験、阪野智啓氏作画)



【図3】隣の家で火災があり生き埋めになった女学生が助けを求めていたが、みんな自分の家のことで精一杯で誰も助けることができなかった(富田達躬さんの体験、藤田哲也氏作画)

まい、寒空の下、1ヶ月間の露天生活を余儀なくされた。また経営していた工場も最終的には解体し、曾祖父の代から続いた家業を途絶えさせることになった。

安城市在住で当時の桜井村藤井集落(現、安城市藤井町)で被災した富田達躬(とみた・たつみ)さんは昭和3年生まれ。当時16歳の旧制中学生徒だった。三河地震発生時には、勉強部屋として使っていた茶室で寝ていた。地震で目が覚め、スタンドをつけようと手を伸ばしたら天井に手が届いた。茶室が松の木にもたれかかったため命が助かった。しかし母屋に寝ていた家族のうち、妹とおばあさんは梁の下敷きになって亡くなった。隣の家では火災があって下敷きになった女学生が助けを求めていたが、みんな自分の家のことで精一杯で誰も助けることができなかった(図3)。この地方は養蚕業が盛んな地域であったため、建物内の風通しをよくするために壁を少なくしていた影響か、ほとんどの家が全壊した。母屋の撤去などの後かたづけには、地震の被害に遭わなかった親戚が頼りになった。また、在郷軍人のような人が集ま

って手弁当で手伝いに来てくれた。家が全壊したにもかかわらず、行政からは。地主であるということで缶詰を1個もらっただけだった。ただ、工作隊という組織が編成されて、山から木を切り出したり廃材を利用したりして、皆で協力して16坪の家を順々に作っていった。戦後は、それまでの養蚕業には見切りをつけて、外貨が稼げる製茶業を始めた。軌道に乗るまで数年かかり、それまでは役場に勤めたりした。

鈴木敏枝(すずき・としえ)さん・沓名美代(くつな・みよ)さん姉妹は、昭和4年・昭和8年生まれで、当時15歳と11歳であった。被害が大きかった集落の一つである、明治村和泉集落(現、安城市和泉町)で被災した。三河地震で家は全壊したが、家族に死者はでなかった。近所の家もほとんど全壊し、死者がでた家もあった。壁土のほこりとにおい、「助けて、助けて」と生き埋めになった人の声が60年たった今でも鮮明に記憶に残っている。地震後数週間は、寒空の下、着のみ着のまま素手・裸足のままで家のかたづけを一日中していた。どの家も被害が大きく、自分のことで精一杯で助けてくれる



【図4】農家のため食糧はあり、井戸水のため水の不自由もなかった
(鈴木敏枝さん・沓名美代さんの体験、藤田哲也氏作画)

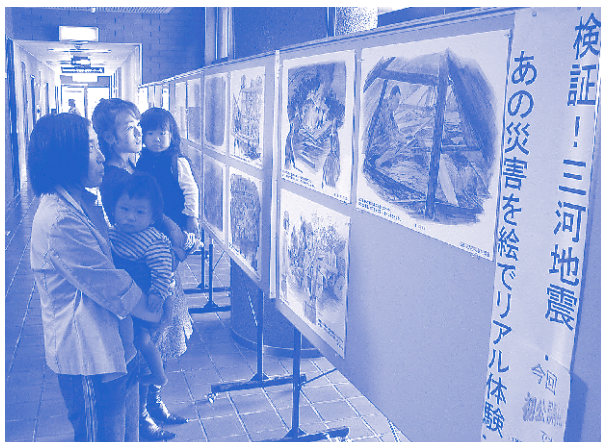
人はいなかった。壊れた木材は煮炊き用の燃料として使い、壊れた瓦は道路の地割れの中に捨てた。煮炊きは数家族が一緒になって行った。煮炊きのスペースは露天だったが、農家のため食糧はあり、井戸水のため水の不自由もなかった(図4)。また地震で死んだ牛を食べることができたことも強く印象に残っている。小学校は1ヶ月ほどして再開した。校舎が全壊したため、工事中の公道を縄で区切り、その区画ごとに各学年が分かれて入って授業を受けた。しばらくして竹とわらで仮の家を作り、工作隊が家を建ててくれるまではそこに住んでいた。粗末な仮の家とはいえ、雨露をしのぐことができるところに久々に移れるため、とてもうれしかった記憶がある。



これまでに8件のインタビューが完了しており、現在も継続してインタビューを実施している。完成した絵も50枚を超える。絵はB3あるいはA3サイズのパネルにし、その絵にまつわる体験談を短いフレーズの文章にして付記している。これらのパネルは希望者への貸し出しも行っている。

震災の絵を使った防災力向上のための活動も始まった。昨年11月には安城市役所防災室とタイアップし、安城市文化センターのロビーで絵画パネルの展示を行った(図5)。また、三河地震からちょうど60年にあたる本年1月13日には、環境総合館レクチャーホールにおいて「三河地震から60年を迎えて」という講演会を地震火山・防災研究センターと災害対策室の共催で行い、エントランスロビーではこの絵画パネルや当時の新聞記事などの展示が実現した。

これまでの調査には、安城市歴史博物館などから、多くの資料や助言をいただいております。調査を進めるには地元の人との協力が必要不可欠である。今後とも地域社会と共同して調査を実施して、古くて新しい事実や教訓を



【図5】安城市役所防災室とタイアップした絵画パネル展示の様子
(安城市文化センターにて)

掘り起こすとともに、その成果を迅速に地元に還元できる「絵」を超える教材の開発も推進したいと考えている。

林 能成（はやし よしなり）

名古屋大学災害対策室・助手。2003年4月から現職。大学院時代は東京大学地震研究所で理学的な視点から地震学を学んでいた。災害対策室で仕事をするようになって2年、毎日、文系の研究者と顔を合わせている影響からか、防災には人間中心の視点も必要だと強く感じるようになった。

木村 玲欧（きむら れお）

名古屋大学災害対策室・助手。2003年4月から現職。大学院時代は京都大学防災研究所で心理学的な視点から阪神・淡路大震災を研究していた。災害対策室で仕事をするようになって2年、毎日、理系の研究者と顔を合わせている影響からか、防災には自然現象の正しい理解が重要であることを強く感じるようになった。

＜原稿募集＞

本誌は名古屋大学環境学研究科の広報誌ですが、内部外部を問わず原稿を広く募集しています。「環境」をキーワードにしたものであれば、内容は問いません。文字数は1,500字～8,000字とし、長い原稿は連載として掲載します。執筆ご希望の方は、最寄の広報委員へご相談いただくか、下記メールアドレスまでお知らせください。

名古屋大学大学院環境学研究科広報委員会
奥田隆明・甲斐憲次・木股文昭・玉樹智文
西澤泰彦・廣瀬幸雄・南 雅代
koho@env.nagoya-u.ac.jp

＜編集後記＞

今号は、スマトラ島沖地震と中越地震の調査報告や三河地震の資料収集の記事が集中したため、「震災特集」のようになりましたが、過去の災害から得る教訓を大切にしたいものです。

また、3月で本研究科を去られる方々の御健勝をお祈りします。

(西澤泰彦記)

KWAN「環」9号
名古屋大学大学院環境学研究科広報委員会
2005年3月発行
<http://www.env.nagoya-u.ac.jp>